

新木山古墳外堤第2次範囲確認調査概報
—ノノワ古墳群発掘調査概報—

広陵町教育委員会

例　言

1. 遺跡名；新木山古墳
2. 所在地；北葛城郡広陵町大字三吉元赤部
3. 現地調査年月日；平成2年12月17日～平成3年3月18日
4. 発掘調査面積；455m²
5. 事業名；新木山古墳外堤第2次範囲確認調査
6. 事業対象面積；67,500m²
7. 調査主体；広陵町教育委員会
8. 調査担当者；広陵町教育委員会事務局　社会教育課　技師　井上義光
9. 調査指導；奈良県教育委員会事務局　文化財保存課
奈良県立橿原考古学研究所
奈良県文化財保護指導委員　坂野平一郎
10. 調査補助員；浅尾和宏、仲富美子、前鶴祥江、前田玲子、蒲生玲子、高井美智子、藤村孝子
11. 調査作業員；藤井清治、北橋昇、松井正一、青木勝義、藤井朝芳、藤山茂一郎、井岡武、平井藤太郎、佐谷耕治郎
12. 執筆者・編集者；広陵町教育委員会事務局　文化財保存センター　副所長　井上義光
13. 保管；出土遺物をはじめ調査記録一切は広陵町教育委員会において保管している。

目　次

I.	契機と経過	1
II.	位置と環境	1
III.	調査の概要	5
1.	立地と現状	5
2.	外堤の調査	6
3.	ノノワ1号墳	8
4.	ノノワ2号墳	14
5.	ノノワ3号墳	18
IV.	結語	21

挿図目次

図1.	馬見丘陵の主要古墳	2
図2.	新木山古墳外堤トレンチ配置図	4
図3.	三吉石塚中近世墓群調査トレンチ測量図	5
図4.	新木山古墳外堤第1トレンチ西壁土層断面図	6
図5.	新木山古墳外堤第3トレンチ西壁土層断面図	7

図6. ノノワ古墳群測量図	9
図7. ノノワ1号墳石室実測図	10
図8. ノノワ1号墳実測図	11・12
図9. ノノワ1号墳排水溝土層断面図	13
図10. ノノワ1号墳出土土器実測図	13
図11. ノノワ2号墳実測図	15・16
図12. ノノワ2号墳排水溝土層断面図	14
図13. ノノワ2号墳出土土器実測図	17
図14. ノノワ3号墳実測図	19・20
図15. ノノワ3号墳排水溝土層断面図	18
図16. ノノワ3号墳出土土器実測図	18

表目次

表1. ノノワ1号墳出土土器観察表	22
表2. ノノワ2号墳出土土器観察表	22
表3. ノノワ3号墳出土土器観察表	22

図版目次

図版1 上 新木山古墳・ノノワ古墳群全景（航空写真）	23
下 ノノワ古墳群全景（航空写真）	23
図版2 上 新木山古墳外堤第2トレンチ全景（北から）	24
下 新木山古墳外堤第3トレンチ全景（北から）	24
図版3 上 ノノワ1・2号墳全景（北から）	25
下 ノノワ1・2号墳全景（東から）	25
図版4 上 ノノワ1号墳全景（南から）	26
下 ノノワ1号墳全景（北から）	26
図版5 上 ノノワ1号墳石室検出状況（北から）	27
下 ノノワ1号墳石室検出状況（東から）	27
図版6 上左 ノノワ1号墳石室西側壁石積状況（東から）	28
上右 ノノワ1号墳石室北小口石積状況（南から）	28
下左 ノノワ1号墳石室西側壁石積状況（東から）	28
下右 ノノワ1号墳石室南小口石積状況（北から）	28

図版 7	上左 ノノワ 1号墳排水溝取付状況（南から）	29
	上右 ノノワ 1号墳排水溝取付状況（東から）	29
	下左 ノノワ 1号墳排水溝土層堆積状況（北から）	29
	下右 ノノワ 1号墳排水溝土層堆積状況（南から）	29
図版 8	上 ノノワ 2号墳全景（南から）	30
	下 ノノワ 2号墳全景（北から）	30
図版 9	上左 ノノワ 2号墳墓壙全景（東から）	31
	上右 ノノワ 2号墳墓壙内土器出土状況（北から）	31
	下左 ノノワ 2号墳排水溝土層堆積状況（北から）	31
	下右 ノノワ 2号墳排水溝土層堆積状況（南から）	31
図版10	上左 ノノワ 1号墳墓壙完掘状況（北から）	32
	上右 ノノワ 1号墳石室解体状況（南から）	32
	下左 ノノワ 2号墳墓壙完掘状況（北から）	32
	下右 ノノワ 2号墳墓壙完掘状況（南から）	32
図版11	上 ノノワ 3号墳全景（南から）	33
	下 ノノワ 3号墳全景（北から）	33
図版12	ノノワ 1・2号墳出土土器	34
図版13	ノノワ 2・3号墳出土土器	35

I. 契機と経過

広陵町は奈良盆地の西辺に位置し、盆地に沿って延びる低位丘陵上には特別史跡巣山古墳をはじめ大小數十基の古墳が築造されている。これらは馬見古墳群とよばれ、奈良盆地北部の佐紀古墳群・盆地東辺の大和・柳本古墳群とともに奈良県下有数の大型古墳密集地帯として知られている。

新木山古墳は、馬見古墳群の中核をなす中央群の一基であり、特別史跡巣山古墳の南約600mに位置する墳丘全長200m、後円部径117m、同高さ18m、前方部長さ118.5m、同幅120m、同高さ15mを測る大型前方後円墳である。現在、墳丘部のみが陵墓参考地に指定され、宮内庁の管轄となっている。

昭和62年度に実施した新木山古墳外堤範囲確認調査では古墳の南側外堤を調査しており、幅約22mの外堤を確認している。新木山古墳の西側外堤上には三吉石塚中近世墓群が営まれており、この調査の際に、後背する丘陵を平坦に切り通し、外堤の外端を示すU字形の溝を確認している。この外堤幅は南側に比べ狭く約18m程であった。

調査の契機は、昭和62年に実施した第1次調査に引き続き、外堤の北側の範囲を確認するため実施したものである。

事業計画については、奈良県教育委員会文化財保存課の指導を受け、調査については奈良県立橿原考古学研究所の助成のもと広陵町教育委員会事務局社会教育課が行った。

第2次調査は外堤の北側で、3本のトレーナーを外堤に直角に設け、西から第1、2、3トレーナーとした。このほかに拡張区を設けた。平成2年12月17日から平成3年3月18日まで行った。

II. 位置と環境

馬見丘陵の地質は鮮新世の終わりから更新世に形成された大阪層群からなる。これは第四紀の気候変動を反映した地層であり、約10万年周期で氷河期と間氷期が繰り返し、氷河期には海退により海平面が下がり、間氷期には氷河が溶けだす海進により海平面が内陸面まで進入してくる。このため、大阪層群は湖沼成層・河成層の疊・砂・シルトおよび粘土と海成層の海成粘土層から構成され、それに多数の火山灰層を挟んでいる。大阪平野の地下には間氷期の海進により形成された海成粘土層が13枚確認され、形成された順にMa0層からMa12層と呼ばれ、大阪層群の層序はこれらの海成粘土層と火山灰層を鍵層にして区分されている。

馬見丘陵の大坂層群の最上位の層準には2層の海成粘土層が挟まれており、下位の海成粘土層(層厚1~5m)はMa1層、その上位6~10mの海成粘土層は(層厚1~2m)はMa2層に対比されて、3枚の火山灰層が確認されている。真美ヶ丘中学校建設に伴うボーリング調査及び馬見中4丁目造成地内で、大阪層群のMa1層とMa2層の間の淡水域に堆積したとされるピンク火山灰層が確認され、本地域の大坂層群は大阪層群最下部~下部に対比されている。^(註1)

馬見丘陵の地形は奈良盆地の西部に位置する南北に長い低位丘陵で、西は葛下川、東は高田川で限られ、北流する両河川が合流する大和川が丘陵の北限となる。南北約7km、東西約3kmの長椭

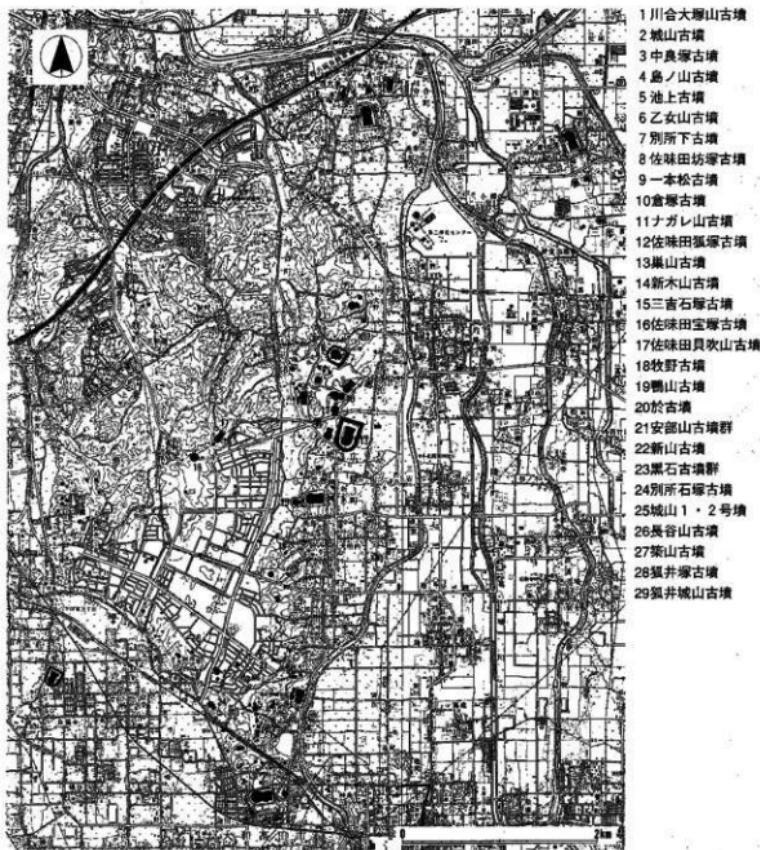


図1 馬見丘陵の主要古墳

円形の丘陵である。西側には二上山塊、東側に奈良盆地が広がる。丘陵内部には小さな佐味田川と滝川が南から北へ流れ、丘陵を三分割する。標高は65~80mで盆地との比高差は20m前後ある。丘陵は南北走向の主幹尾根とそこから派生する小尾根と小谷で形成され、尾根部分には雑木林と畑地が営まれ、谷間には小規模な水田が形成されている。丘陵南部には広陵町から香芝市にまたがる広範囲に真美ヶ丘ニュータウンが広がっている。

馬見丘陵の東斜面には特別史跡巣山古墳をはじめとする大型前方後円墳が連なり、盆地東部の大和・柳本古墳群、盆地北部の佐紀古墳群とともに奈良県でも有数の大型古墳群集地帯であり馬見古墳群と総称される。しかし、墓域を共通する一つの集団によって形成された古墳のグループ

として古墳群を理解するならば馬見古墳群という呼称自体に問題がないわけではない。つまり丘陵上に位置する大型古墳群も決して連続した位置に形成されるわけではなく、古墳の分布密度により大別して三グループとして認識されている。川合大塚山古墳（1）を中心とする北部の一群、巣山古墳（13）、新木山古墳（14）、乙女山古墳（6）を中心とする中央部の一群、新山古墳（22）、築山古墳（27）を中心とする南部の一群、さらに別所石塚古墳（24）、城山第1号、第2号墳（25）の一群、安部山古墳群も単独の古墳群として認識できる。

北群は全長197mの前方後円墳である川合大塚山古墳を盟主墳として周辺に城山古墳（2）、中良塚古墳（3）等の100m前後の前方後円墳が築造され、これらに小規模な円・方墳が附属する。川合大塚山古墳は出土する埴輪から5世紀中葉以降に相応する時期が考えられ、鳥ノ山古墳（4）に後続する大型前方後円墳である。これら北群は大和川、曾我川などの河川が合流する低地に立地するという共通性から、中央群、南群とは経済的基盤が異なり、ヤマト政権の覇権が大和川に及んだという解釈がなされている。

中央群は巣山古墳（13）、新木山古墳（14）など全長200mを越す大型前方後円墳、ナガレ山古墳（11）、倉塚古墳（10）、一本松古墳（9）など100m前後の前方後円墳が築かれる。このほか中央群には帆立貝式古墳のなかで最大級の規模を誇る乙女山古墳（6）をはじめ、池上古墳（5）、佐味田狐塚古墳（12）、三吉2号墳、三吉石塚古墳（15）等の帆立貝式古墳が集中して築かれている。これらとやや離れ、佐味田川を挟んだ丘陵内部には4世紀後半の佐味田宝塚古墳（16）、佐味田貝吹山古墳（17）が築造されている。宝塚古墳の南西300mには、6世紀末葉の巨大な横穴式石室を持つ円墳である牧野古墳（18）が築造され、舒明天皇の父にあたる押坂彦人大兄皇子の成相墓の可能性が指摘されている。

南群には4世紀中頃に築造された前方後方墳である新山古墳（22）、全長210mの大型前方後円墳である築山古墳（27）が築造されている。築山古墳の築造時期は外堤東側の調査で出土した円形透かしの円筒埴輪と石棺仏に転用された退化した長持形石棺から古墳時代中期以降に築かれたと考えられていたが、宮内庁書陵部の調査で、新山古墳に後続する4世紀末葉に築かれた事が判明した。丘陵南西部香芝市狐井に位置する狐井城山古墳（29）も単独で存在し、埋葬施設は下田小学校の長持形石棺とされ、6世紀初頭の築造時期が考えられている。

中央部の一群について、今一度範囲を縮めて観察する。造墓活動の盛期は古墳時代前期後半から中期前半の限られた時期と考えられ、群の形成は直径60mの円墳又は帆立貝式古墳と考えられる別所下古墳^(注2)、ナガレ山北3号墳が前期後半に築かれたことに始まる。佐味田宝塚古墳の築造はこれらにやや遅ると考えられ、前期末から中期初頭には巨大な外堤と周濠を持つ巣山古墳が築かれる。巣山古墳の西側には前後する時期に密接な関係にあると考えられる佐味田狐塚古墳（12）、三吉2号墳が築かれる。後続する大型前方後円墳の築造は認められず、100m級の前方後円墳であるナガレ山古墳も同時期に築かれることになる。中期前半には帆立貝式古墳の乙女山古墳（6）、池上古墳（5）が築造される。巣山古墳と同規模と考えられる新木山古墳も該期に築かれたと考えられる。中期中葉以降になると100mを越す前方後円墳は築かれなくなり、墳形



図2 新木山古墳外堤 トレンチ配置図

も円墳又は方墳、帆立貝式を採用する。築造位置も丘陵主幹部から離れ、主幹部から派生する尾根の縁辺部に移るものや、盆地を望めない佐味田川に面する支丘に占地するものもある。尾根の縁辺に築かれる古墳としては一辺45mの方墳である文代山古墳、円墳のシドマ塚古墳^(註1)があり、佐味田川に面した尾根上には、直径60mの円墳である佐味田坊塚古墳（8）、帆立貝式古墳の三吉石塚古墳（15）が築かれる。また、土取りにより埋滅した十条山古墳、道向山古墳の伝承も残されている。一方、丘陵内部においてもカタビ1~4号墳、ナガレ山北1~5号墳等、數基単位でまとまりを持つものが観察される。また、古墳時代後期には、高田川岸で小規模古墳が営まれ、寺戸鳥掛遺跡^(註4)では直径15m前後の円墳または前方後円墳と考えられる周濠から武人・盾持人埴輪が出土している。

（註1） 菊野耕三「広陵町の地質」「広陵町史」本文編 広陵町 2001年度

（註2） 東潮、坂崎「佐味田別所下古墳発掘調査報告」「奈良県遺跡調査概報」奈良県立橿原考古学研究所 1986年度

（註3） 井上義光「シドマ塚古墳範囲確認調査概報」「奈良県遺跡調査概報」奈良県立橿原考古学研究所 1995年度

（註4） 高橋浩樹「寺戸鳥掛遺跡発掘調査概報」「広陵町埋蔵文化財調査概報6」広陵町教育委員会 1993年度

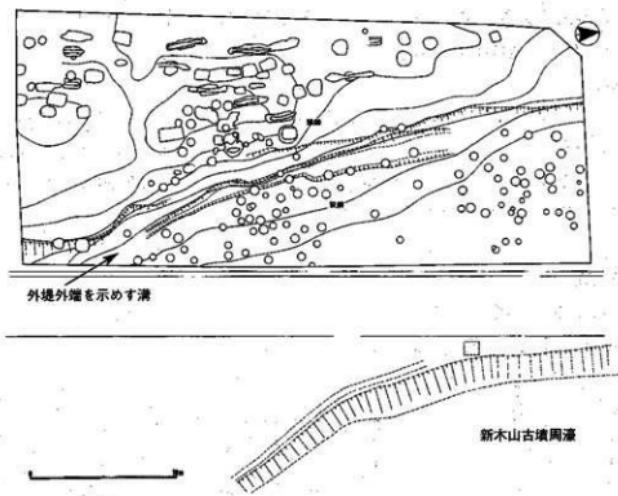


図3 三吉石塚中近世墓群調査トレンチ測量図

III. 調査の概要

昭和62年度に実施した第1次調査では、古墳の南側外堤の範囲を確認しており、その幅は約22m程であった。また、新木山古墳の西、後円部外堤上には三吉石塚中近世墓群が営まれており、この調査の際に、下層から後背する地山を平坦に切り通し、外堤の外端を示す断面U字形の溝を確認している。この外堤幅は南側に比べて狭く約18m程であった。

平成2年度は北側に調査区を移し、3本のトレンチを外堤に直角に設け、西から、第1、第2、第3トレンチとした。この他に、外堤を造るため地山を平坦に削り込んだ後、斜面を利用して築かれた堅穴式小石室を調査するために拡張区を設けた。(図2)

1. 立地と現状

新木山古墳は奈良盆地に東面する前方後円墳であり、高田川と佐味田川に挟まれた南北方向の低位丘陵から東へ派生する小支丘を利用して築造されている。後円部は丘陵基幹部を利用し、後円部東側周濠は旧地形を大きく削り込んで築造されたと考えられる。

本墳は、馬見古墳群のうち中央群に包摂されるが、古墳が最も密集する巣山古墳、乙女山古墳からやや離れて築かれている。周辺には帆立貝式古墳である三吉石塚古墳以外、小規模な円墳が伴うのみである。

現状は広葉樹と針葉樹が墳丘全体を覆うように密生する。野淵竜潜の「大和國古墳墓取調図」

(明治26年)によれば墳丘には松が生え、良く植生管理されている。地元の古の話によれば、松茸が良く採れたと聞き及ぶ。また、帝室林野局が作成した「御陵墓参考地之図」(昭和3年)によれば、墳丘には針葉樹が記されている。現在、古墳の周辺は宅地化が進んでいる以外は、水田、畑、溜池の変更はない。

測量図から墳丘規模を観察すれば墳丘全長200m、後円部径117m、同高さ19m、前方部幅118m、同高17mを計測する。墳丘主軸はN-92°-Wにあり、両くびれ部に造出しが存在する。墳丘基底は後円部で標高53.80m、北側くびれ部で53.40m、南側くびれ部で52.40m、前方部で52.20~51.60mを測り、西から東へ緩傾斜となる。

2. 外堀の調査

(1) 第1トレーニチ (図4、図版11)

第1トレーニチは町道の北側から北北東方向に幅4m、長さ16mで設定し、北側から油圧式ショ

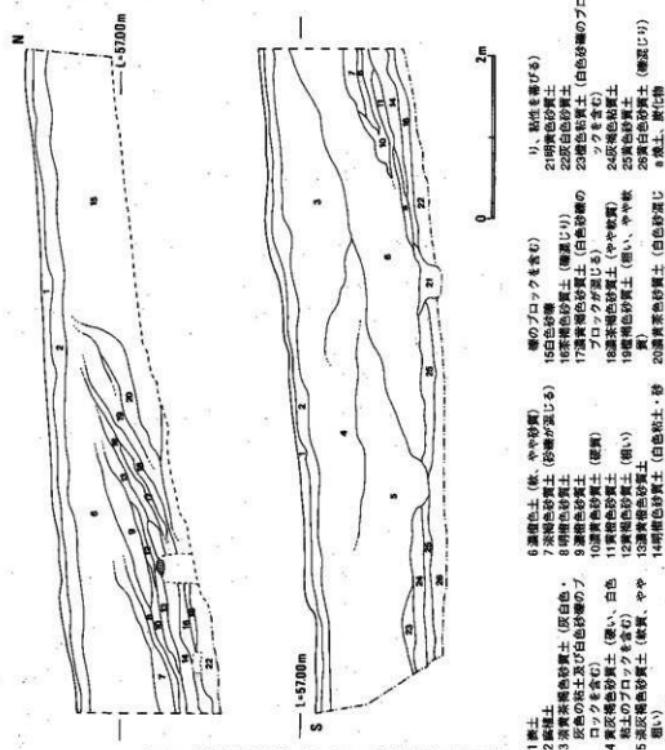


図4 新木山古墳外堀 第1トレーニチ西壁土層図 (1/60)

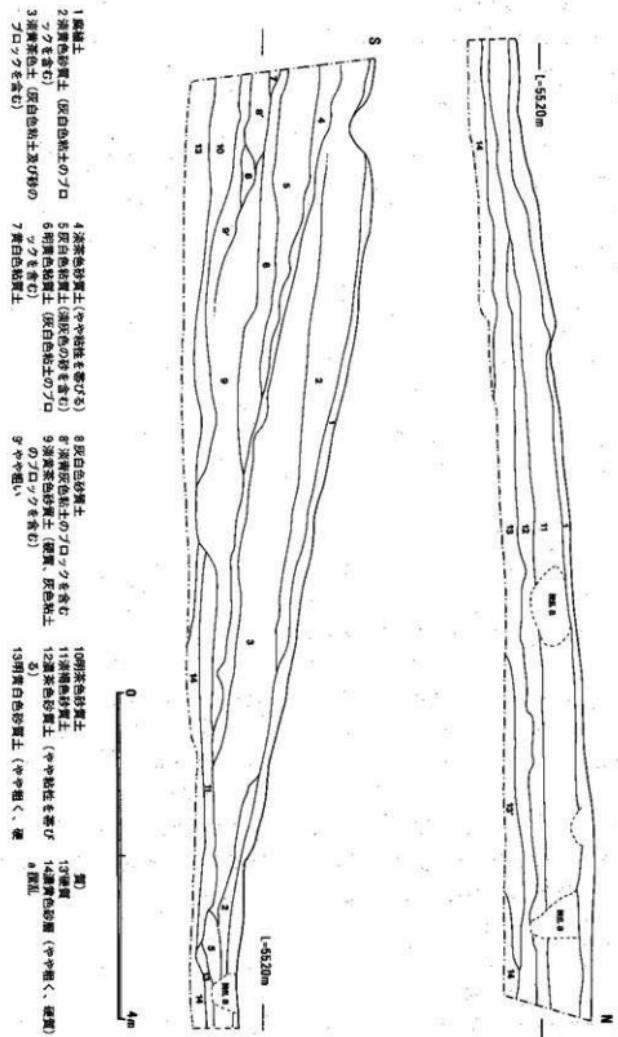


図5 新木山古墳外堤 第3トレンチ土層図 (1/60)

ベルで掘削を行った。土層図はトレンチの西壁断面で表土の腐植土を除くと北端では地山である白色砂礫（15層）が確認される。地山はノノワ3号墳が築かれた高まりから急傾斜で落ち込み灰

白色砂質土（22層）、黄白色砂質土（26層）と続く。明黄色砂質土（21層）は東西方向に検出した溝の埋土で黄色砂質土（25層）が3号墳築造時の基盤層となる。溝の北側には焼土、炭化物の堆積層（a層）が検出される。3号墳から延びる排水溝の肩となるのは黄褐色砂質土（12層）、淡黃橙色砂質土（13層）、明橙色砂質土（14層）である。トレンチ中央から南端には淡黃茶褐色砂質土（3層）、黄灰褐色砂質土（4層）、淡灰褐色砂質土（5層）が約0.8~1.0m程堆積し、この堆積土の中には還元された灰白色の地山土が混入していることから新木山古墳の周濠を後世に農業用溜池として利用するようになる頃、溜池の貯水量を確保又は増加させるため池床を浚えた土を外堤上に盛り上げた結果と考えられる。その時期は堆積土に混入する黒色土器片から、浚渫時期の上限を平安時代中期に求められる。

外堤は、北側からの丘陵を削り込み、平坦部を造り出したことがわかるが、盛土の痕跡は認められなかった。この削り込んだ斜面を利用して横穴式石室又は、竪穴式小石室を構築していたと考えられる。

（2）第2・第3トレンチ（図5、図版2）

町道の南側に外堤と直角に設定したトレンチである。第2トレンチは、幅4m、長さ17m、第3トレンチは、幅4m、長さ23mで設定したが、やはり第1トレンチで検出した暗灰色粘土と青灰色に還元した地山土が厚く堆積していただけである。

第2・3トレンチを設定した現況地形の盛り上がりは、周濠を水田用溜池として利用するようになった時期に浚渫をしたときのものと考えられる。

第3トレンチではこの様相が層位として確認する事ができ、その初期は堆積土中の黒色土器から平安時代中期から近世まで数回にわたり行われている。

第3トレンチの現況地形は、南端が最も高く中央部で窪み、北へ緩やかに立ち上がる。層位は全く異なり、地山と考えられる明黄色白色砂質土（13層）、淡黄色砂（14層）は北から南へ緩傾斜する。浚渫土は淡黄色砂質土（2層）～淡黃茶色砂質土（9層）で地山上に約2m程堆積する。淡茶色砂質土（4層）はトレンチの南端から斜めに下り、有機質土があることから、ある時期の地表面であったと考えられる。淡黄色砂質土（2層）、淡黃茶色土（3層）は近世の浚渫土と考えられ、淡黃茶色砂質土（9層）から黒色土器片が出土し、浚渫の開始は中世以前に遡ると考えられる。第2・3トレンチとともに、外堤外端を示す遺構ではなく、地山を平坦に切り通しているだけで盛土の痕跡は認められなかった。

3. ノノワ1号墳（図6、図版3）

第1トレンチの西側、拡張調査区で2基の竪穴式小石室を検出している。築造位置は北側からせり出す丘陵を、新木山古墳外堤として平坦に切り通した斜面を利用する。墓擴を斜面の上端近くに穿ち、斜面を利用して排水溝を設けている。1号墳の天井石は検出時には抜き取られていた。

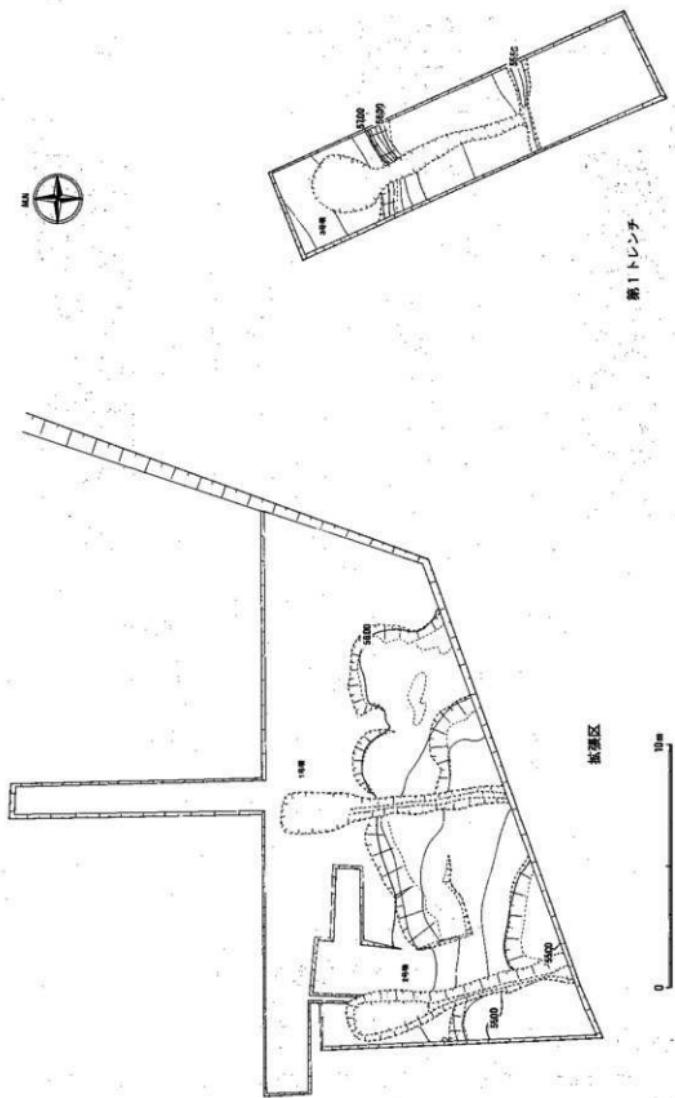


図6 ノノワ古墳群測量図 (1/200)

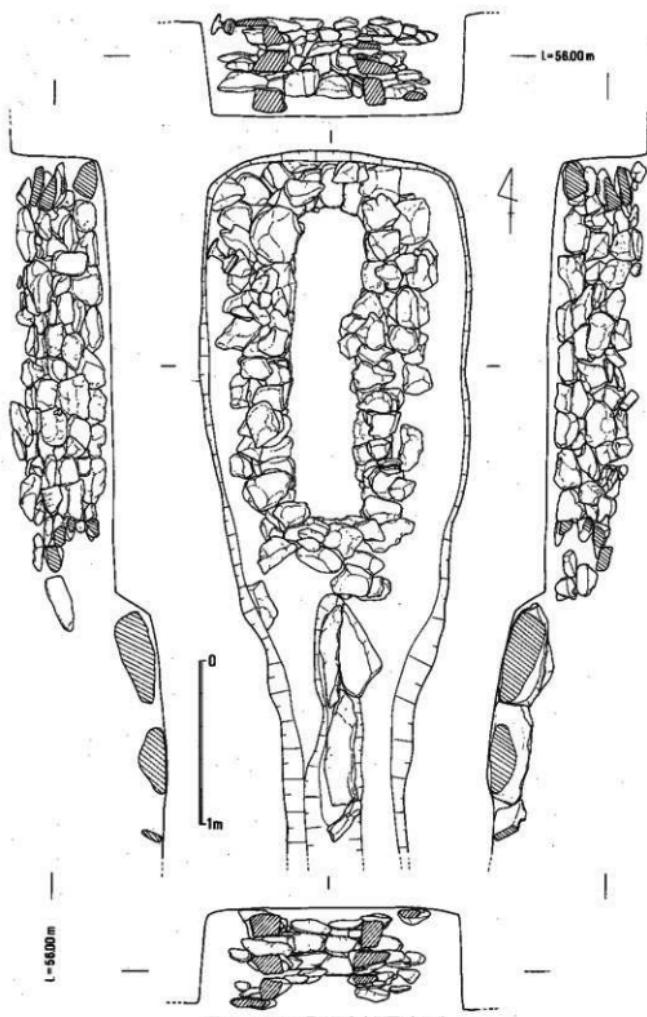


図7 ノノ1号墳石室実測図 (1/30)

埋葬施設 (図7・図版4・5・6・10)

1号墳墓は南北290cm、東西160cmで隅丸長方形を呈する。深さは検出面から約60cmで、ほぼ中央に竪穴式小石室を構築する。主軸は磁北方向にあり、石室内法は長さ190cm、幅50cmで長辺

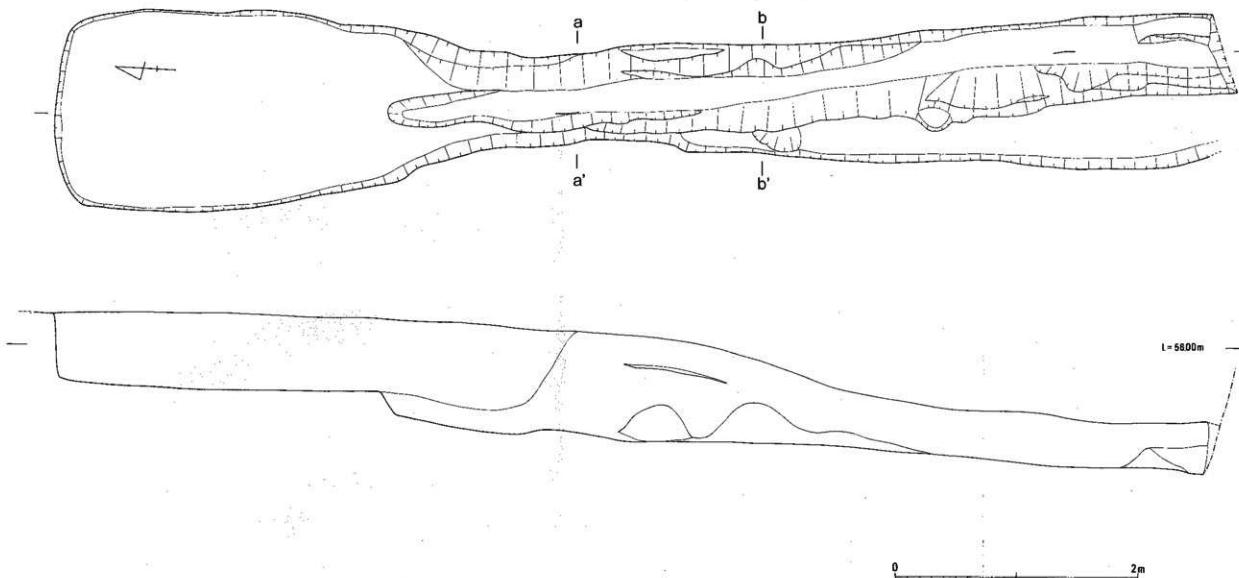


図8 ノノワ1号墳 窟洞図 (1/30)

20~30cmの石材を小口積みにして4段に積み上げる。墓壙と石室の空間の狭い北辺、西辺から石積みがなされたと考えられる。石材は多種多様で凝灰岩の板石、サヌカイト、輝石安山岩等が使用されている。天井石は既に抜き取られており、石室内に副葬品は無く、墓壙の北西部から須恵器高杯が出土している。墓壙床面は北から南に緩やかに傾斜し高低差は約10cm程ある。

石室の周囲には掘り割り等、光域を限る施設は認められず、石室の上には盛土等の痕跡がなかつた。

排水溝（図9・図版7）

墓壙の南には長さ6.8m程の排水溝が取り付く。石室底と排水溝の比高は約20cm、溝は、墓壙取り付き付近で幅80cm、深さ90cm、南端で幅50cm、深さ40cmを計測する。排水溝の墓壙取り付き付近と南端で約40cmの高低差を設ける。墓壙取り付き付近の排水溝の断面はV字状を呈し、石材が埋め込まれていた。長さ60cm以上の凝灰岩の板石が埋められ、暗渠の機能を持たせていたと考えられる。墓壙を完掘すると排水溝の取り付き部分が墓壙底から幅35cm、深さ20cm程掘り込まれ、溝埋土の最下層には地山土の堆積層（10層）、その上には茶褐色粘質土（8層）があることから、石室付近は暗渠の様に溝を埋め、下の方は開渠にしていたのかもしれない。

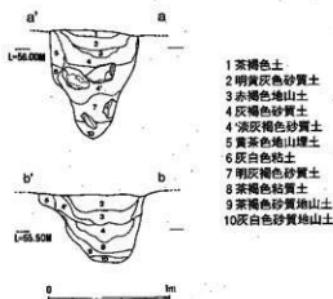


図9 ノノワ1号墳排水溝土層断面図

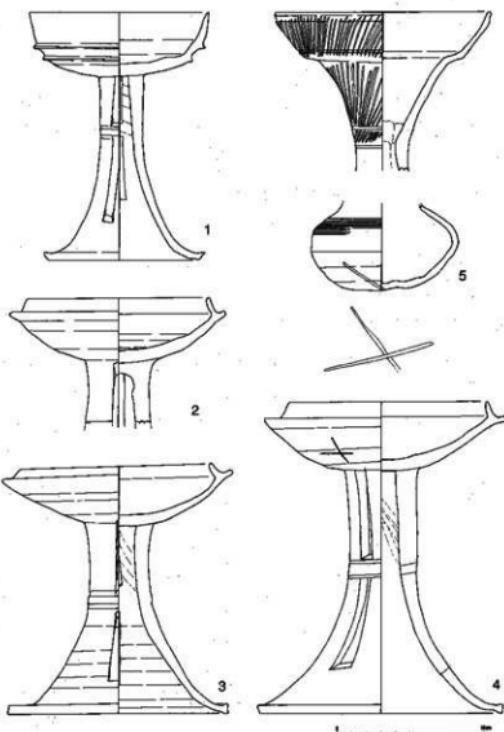


図10 ノノワ1号墳出土土器実測図

遺物（図10・図版12、表1）

堅穴式小石室の横に横倒しに置かれた長脚二段無蓋高杯（1）は完形品で、供獻土器と考えられる。杯部と底部の境に稜を巡らし、脚部には長方形スカシを2方向に2段施す。長脚二段有蓋高杯（2）（3）（4）はいずれも排水溝埋土上層から出土したもので、杯部は浅く、口縁部たちあがりは短く内傾する。脚部は長方形スカシを2方向に2段施す。底も排水溝上層から出土したもので、体部最大径の約1.5倍の口縁部径を持つ。円孔は欠失していた。口縁部、口頭部の平行線文は倒立させ、ヘラ状工具で施文したと考えられる。須恵器高杯は陶邑編年TK-209に併行すると考えられる。

4. ノノワ2号墳

埋葬施設（図11・図版8・10）

1号墳の西側に築かれた堅穴式小石室で、墓壙は南北350cm、東西190cmを測り、長方形プランを呈する。主軸方向はN-15°-Wにあり、検出面から墓壙底まで70cm余りの深さが残る。墓壙には、本来石室が構築されていたと考えられるが、搅乱され、石材が抜き取られていた。墓壙底には20石余りの石材が残されていた。埋土から黒色土器が出土することから搅乱は平安時代に行われたと考えられる。墓壙の周縁を壁に沿って幅15cm、深さ10cmの浅い溝が全周し、南側に設けられた排水溝に取り付く。石室床面は北から南へ緩やかに傾斜し、高低差は12cm程ある。石室床面と排水溝底は約20cmの段差が設けられている。遺物は石室の北壁に沿って須恵器短脚高杯、台付長頸壺が出土しているほか鉄釘がある。

石室の周囲には掘り割り等、兆域を限る施設は認められなかった。また、石室の上には盛土痕跡がなかった。

排水溝（図12・図版9）

排水溝は検出長さ5.8m程あり、墓壙取り付き部で幅100cm、深さ60cm、下端で幅60cm、深さ30cmを計測する。墓壙取り付き部分と下端で約40cmの高低差を設ける。1号墳の排水溝とは異なり、墓壙取り付き部分には石材が検出されず、当初から開渠とした可能性がある。b-b'断面に見

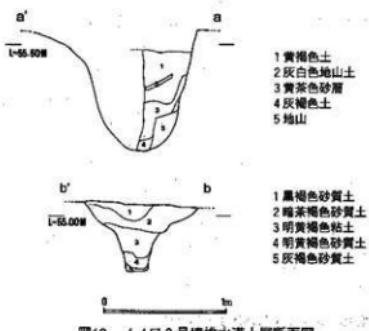


図12 ノノワ2号墳排水溝土層断面図

られる黒褐色砂質土（1層）、暗茶褐色砂質土（2層）が有機質土の痕跡で、そのほかは、地山崩壊土であるため、築造後早い時期に埋まったと考えられる。

墓壙の壁に沿って溝を巡らす構造は1号墳と比べ、排水機能はより進んだ構造である。

遺物（図13・図版12・13、表2）

墓壙奥壁から出土した短脚高杯（1）と台付長頸壺（7）は、原位置を失うが、完形品

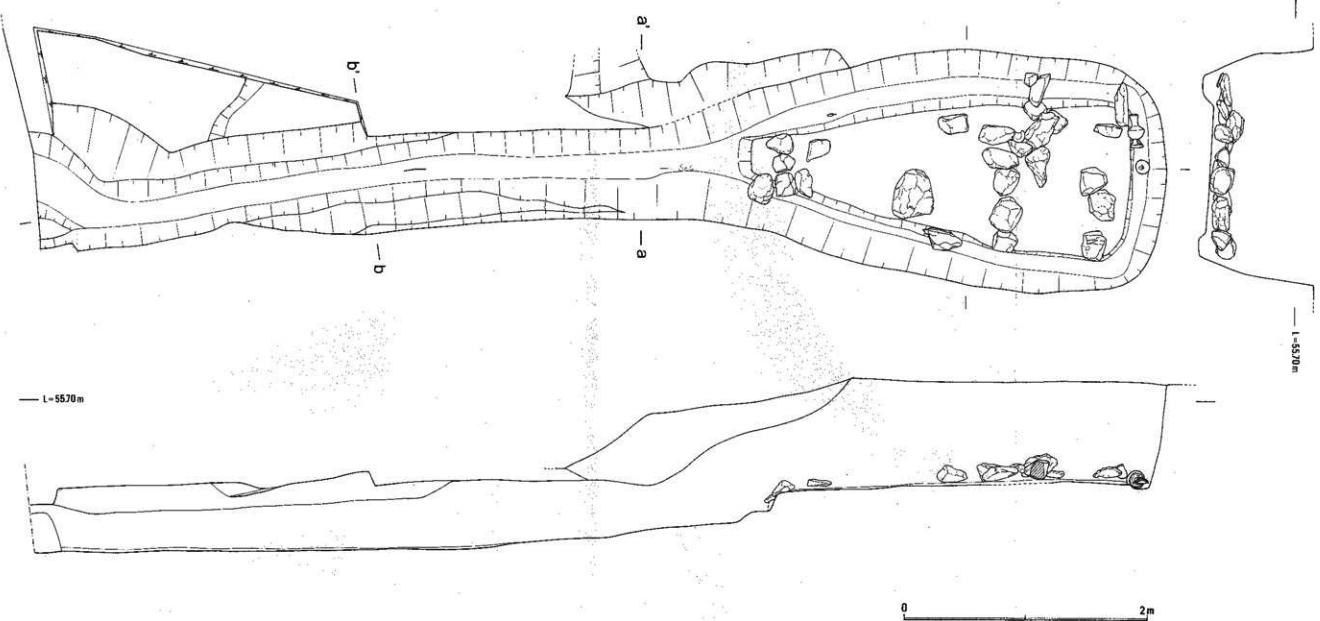


図11 ノノワ2号墳 実測図 (1/30)

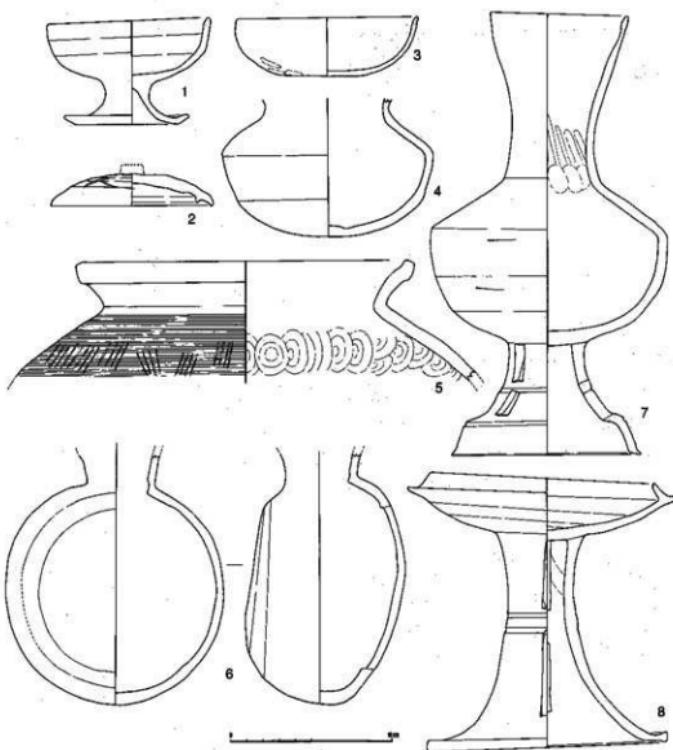


図13 ノノワ2号墳出土土器実測図

で供獻土器と考えられる。高杯の口縁部と底部の境は不明瞭で形骸化が進んでいる。台付長頸壺の体部肩は張らず、脚部には長方形スカシを3方向2段に穿つ。壺蓋(2)は、台付長頸壺(7)とは対にならない。東斜面出土の提瓶(6)の把手の表現は認められず、省略が進んだ形式である。排水溝埋土上層出土の高杯(8)は杯部が浅く、口縁部たちあがりは短く内傾する。脚部は長方形スカシを2方向に2段施す。提瓶、高杯はTK-209の特徴を持ち、台付長頸壺はやや遅る可能性がある。

築造時期は6世紀末と考えられる。

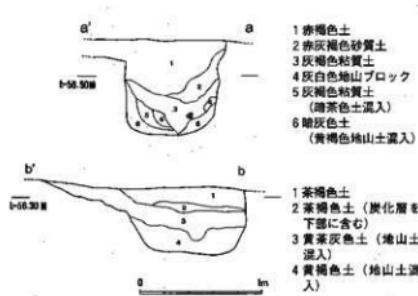


図15 ノワ3号墳排水溝土層断面図

5. ノワ3号墳

埋葬施設 (図14・図版11)

石室構築のための墓壙は南北295cm、東西235cmを測り、平面プランは梢円形を呈する。深さは検出面から120~150cm程度で、主軸方向はN-21°-Wにある。平面梢円形にあるのに北壁が直線的に掘り込まれたため北東、北西隅でオーバーハングする。埋土の上層から須恵器短頸甕が出土したため古墳墓壙として精査した。焼土混じりの土が、平安時代の土師器と埋土下層から出土するため該期に擾乱されていると考えられる。墓壙の底には長さ30cm前後の石材が散乱していた。他に須恵器高杯、提瓶が出土した。2号墳同様、墓壙内部は大きく擾乱されていたが、墓壙平面は1・2号墳が長方形であるのに3号墳は方形で、深さも2倍近くある。

石室の周囲には掘り割り等、兆域を限る施設は認められなかった。また、石室の上には盛土痕

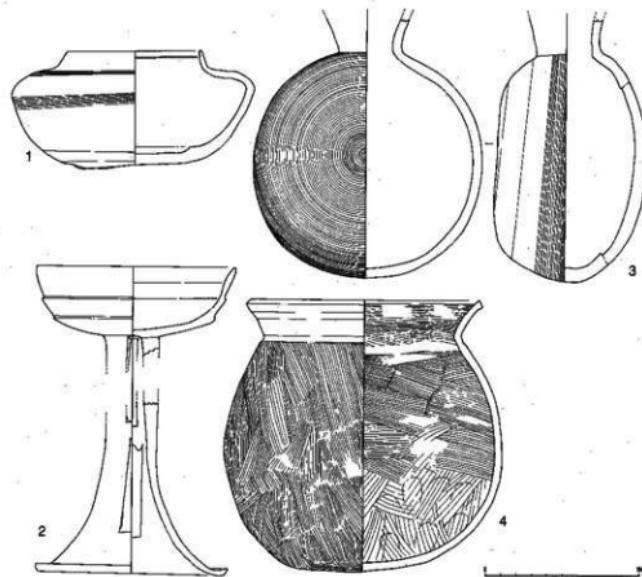


図16 ノワ3号墳出土土器実測図

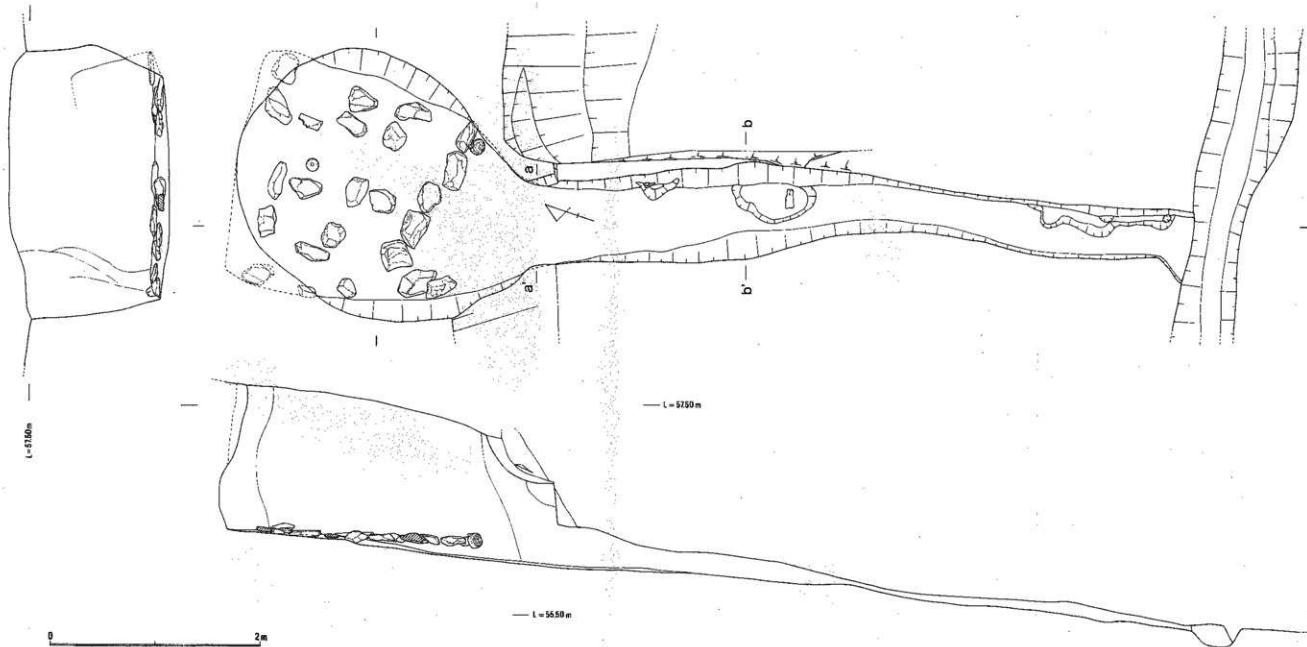


図14 ノノワ3号塘 施測図

跡がなかった。

排水溝（図15）

墓壙南には、長さ6mの排水溝が取り付く。溝は墓壙取り付き付近で幅80cm、深さ40cm、末端で幅45cm、深さ10cm程残る。排水溝は最終的に幅60cm、深さ20cmの東西方向の溝に取り付く。
a-a' 断面の赤褐色土（1層）～灰白色地山土（4層）は、墓壙搅乱後の土である。

b-b' 断面の黄茶灰褐色土（3層）、黄褐色土（4層）は地山混入土で排水溝掘削後、早い時期に埋まつたと考えられる。灰褐色土（1層）の最下部には炭化物が認められた。

遺物（図16・図版13、表3）

墓壙底から出土した高杯（2）と提瓶（3）は供獻土器と考えられる。高杯（2）は杯部が浅く、口縁部たちあがりは短く内傾する。脚部は長方形スカシを2方向に2段施す。提瓶（3）の把手の表現は認められず、省略が進んだ形式である。塙（1）は墓壙の埋土の最上層から出土したもので、肩が張るが、成型時か焼成時に変形したと考えられる。

高杯、提瓶は陶邑編年のTK-209の特徴を示す。

IV. 結語

新木山古墳北側外堤は後背する山側を平坦に切り通して造られ、盛り土は行わず、外堤外端に溝を掘る。第2・3トレンチでは外堤外端を示めす溝は検出できなかった。少量であるが円筒埴輪等が出土しており、外堤にも疎らに円筒埴輪を立てていたと考えられる。

新木山古墳築造後、6世紀末葉になると外堤の斜面を利用して堅穴式小石室が築造される。いずれも排水溝を持つが墓壙への取り付ちは様々である。

1・2号は堅穴式小石室と考えられ、南側に排水溝を設ける。2号古墳には墓壙壁に沿って巡る周壁溝が認められる。3号墳は横穴式石室を構築していた可能性もある。

いずれの古墳も掘り割り、墳丘を持たなかつたと考えられる。

副葬品の須恵器に型式差が認められず、切り合ひも無いため築造順を明らかにできないが、1号墳と2号墳を比べると墓壙の周囲に周壁溝を巡らす2号墳が構造的に優れ、後出の可能性がある。

平安時代中期以降、莊園開発の活発化に伴い、新木山古墳の周濠を灌漑用溜池としての利用を図り、貯水量を増加させるため、周濠底の浚渫が大規模に行われたと考えられる。

2号・3号墳の石室石材の抜き取りを目的に行われたと考えられる擾乱も該期と考えられる。

表1. ノワ1号墳出土土器観察表

番 号	径量 (cm)	形 様 の 特 徴		技 法 の 特 徴	色 調	地 士・地 成	備 考
		口 徑	高 度				
1 復原部高杯	12.2	17.0	長脚二段鉢皿形 杯口縁部と底部の間に二段の縫を設 け、二方向に二段スカシ	新部外面、底部はヘラ切りの後ナ ダ。脚部外面、新部内面回転ナダ	青青灰色 良好	白色砂粒 良好	基壇埋方
2 復原部高杯	12.5	-	長脚二段鉢皿形 杯口縁部のたわみがりは底く内側する 二方向に二段スカシ	新部外面、底部はヘラ切りの後ナ ダ。脚部外面、新部内面回転ナダ	青灰色 不良	白色砂粒 不良	排水溝
3 復原部高杯	13.1	17.0	長脚二段鉢皿形 杯口縁部のたわみがりは底く内側する 二方向に二段スカシ	新部外面、底部はヘラ切りの後ナ ダ。脚部外面、新部内面回転ナダ	青青灰色 不良	少量の砂粒 少量の砂粒	排水溝第一層 排水溝第一層
4 復原部高杯	13.4	21.3	長脚二段鉢皿形 杯部底面にヘラ記号	新部外面、底部はヘラ切りの後ナ ダ。脚部外面、新部内面回転ナダ	青青灰色 不良	青青灰色 不良	排水溝第一層 排水溝第一層
5 復原部盤	14.8	16.7	小型の盤で、大きな口縁部をもち、 体部底は口縁部の 2 分、体部直面 部を丸めし横割引点文を施 すにヘラ記号、体部の円孔部分は欠失。	口縁部、口縁部には平行弦文、底 面を丸めし横割引点文を施す	青灰色 良好	少量の砂粒 良好	排水溝第一層 良好

表2. ノワ2号墳出土土器観察表

番 号	径量 (cm)	形 様 の 特 徴		技 法 の 特 徴	色 調	地 士・地 成	備 考
		口 徑	高 度				
1 復原部高杯	10.1	6.5	短脚鉢皿小笠形 口縁部と底部の底が不整削。底部は 八の字形に開き、端部は底く上がる	新部外面、底部はヘラ切りの後ナ ダ。脚部外面はヘラ削り	青青灰色 良好	白色砂粒 良好	基壇表面
2 復原部盤	8.0	2.0	直盤 火井部中央のつまみは大矢、口縁部 の小突りは抜き・丸い	外面はヘラ切り、口縁部はナダ。 内面回転ナダ	青青灰色 良好	黑色砂粒を 少量含む	排水溝
3 土師鉢	11.2	3.6	口縁部と内面両側に立ちあがる 脚部と口縁部の底が不明確	摩擦が著しく底部に埋削痕が残 る以外不明	青青灰色 不良	少量の砂粒 不良	基壇内
4 復原部盤	13.0	8.4	体部の突起やつまみは (無) 脚部底面にヘラ記号	底以下はヘラ切りの後ナダ、底面 はヘラ削り、内面回転ナダ	青青灰色 不良	少量の砂粒 不良	排水溝第一層 排水溝第一層
5 復原部盤	20.8	7.0	口縁部を外反して立ちあがり、端部 (無) を肥ませる。	口縁部を外反して立ちあがり、端部 を肥ませる。	青青灰色 不良	少量の砂粒 不良	排水溝第一層 排水溝第一層
6 復原部盤	6.4	15.2	把手表面が丸われ、体部は膨らむ (無)	体部内面回転ナダ 底部がカキメではなく、内面ヘラ削 りとナダで仕上げる	青青灰色 不良	黑色砂粒を 少量含む 不良	東斜面
7 復原部盤	8.5	27.2	台付灰被器 口縁部は内側しながら底く立ちあが る。体部の突起やつまみは。	口縁部から肩部ヨコナダ、底以下 回転ナダ、腰部ヨコナダ	青青灰色 不良	砂粒を少量 含む 不良	基壇表面
8 復原部高杯	13.8	17.2	長脚二段鉢皿高杯 口縁部の立わみがりは底く内側する 二方向に二段スカシ	新部外面、底部はヘラ切りの後ナ ダ。脚部外面、新部内面は回転ナ ダ	青青灰色 不良	少量の砂粒 不良	排水溝第一層 排水溝第一層

表3. ノワ3号墳出土土器観察表

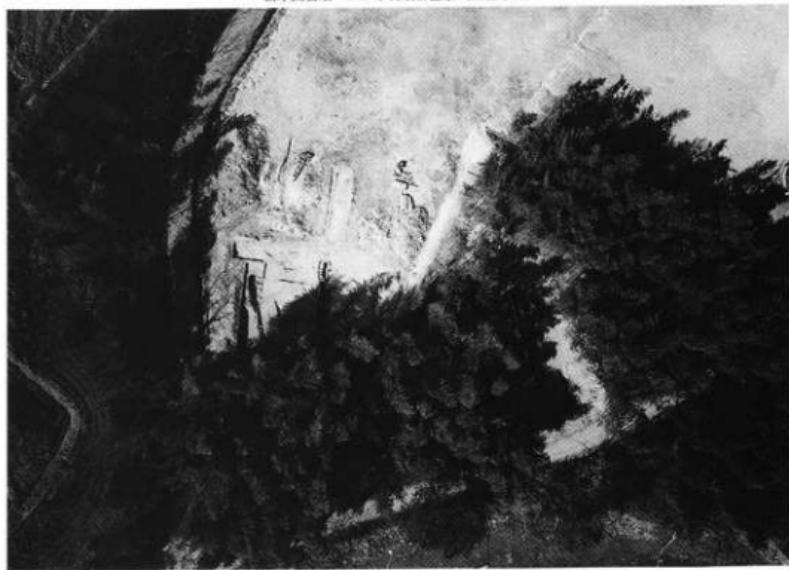
番 号	径量 (cm)	形 様 の 特 徴		技 法 の 特 徴	色 調	地 士・地 成	備 考
		口 徑	高 度				
1 復原部盤	8.5	7.6	口縁部は内側ながら底く立ちあが る。体部の突起やつまみは。	口縫部から体部外側はヨコナダ、 底部は回転ナダ削り、内面回転ナ ダ、底下にカキメ	青青灰色 不良	少量の砂粒 不良	基壇第一層
2 復原部高杯	12.9	20.1	長脚二段鉢皿高杯 口縁部と底部に二段の底を設 け、脚部二方向に二段スカシ	新部外面はヘラ切り、脚部外側は 摩擦して不明。新部内面は回転ナ ダ	灰褐色 不良	白色砂粒 不良	基壇内
3 復原部盤	6.6	17.0	把手表面が丸われ、体部は膨らむ (無)	体部はカキメと田耕ヘラケツリと ナダで仕上げる	青青灰色 不良	砂粒を少量 含む 不良	基壇内
4 土師鉢	15.3	17.6	口縁部は外反しながら立ちあがり、 端部に面を寄せた。体部に窓はな く、丸底とする。	口縁部外側はヨコナダ、口縁部内 面はハケ、体部外側はハケ、底 面内面に埋削痕	淡黃褐色 不良	少量の砂粒 不良	排水溝

図 版

〈図版1〉



新木山古墳・ノノワ古墳群全景（航空写真）



ノノワ古墳群全景（航空写真）

〈図版2〉



新木山古墳外堀第 3 レンチ全景 (北から)



新木山古墳外堀第 2 レンチ全景 (北から)

〈図版3〉

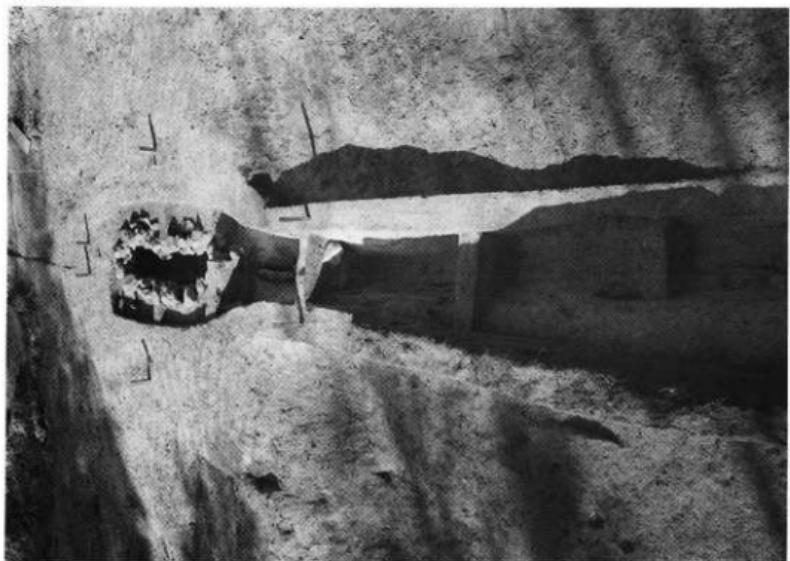


ノノワ1・2号墳全景（北から）



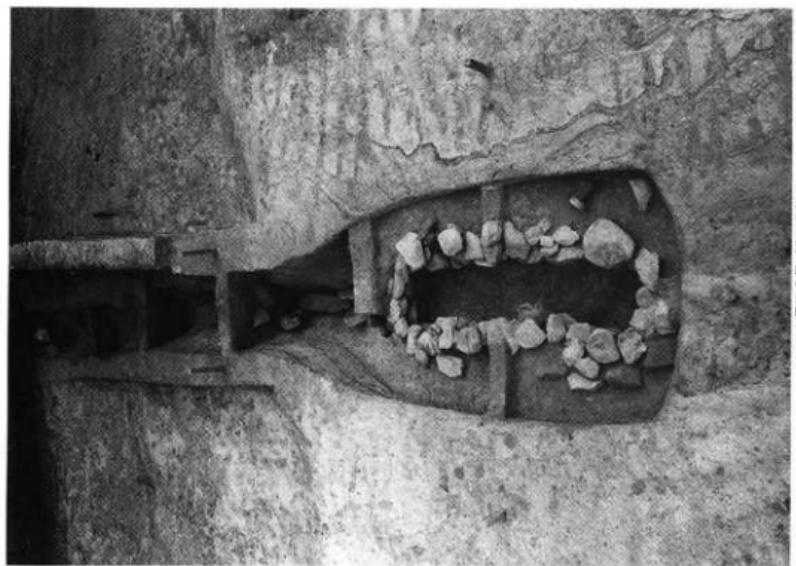
ノノワ1・2号墳全景（東から）

〈図版4〉



ノノワ1号墳全景(南から)

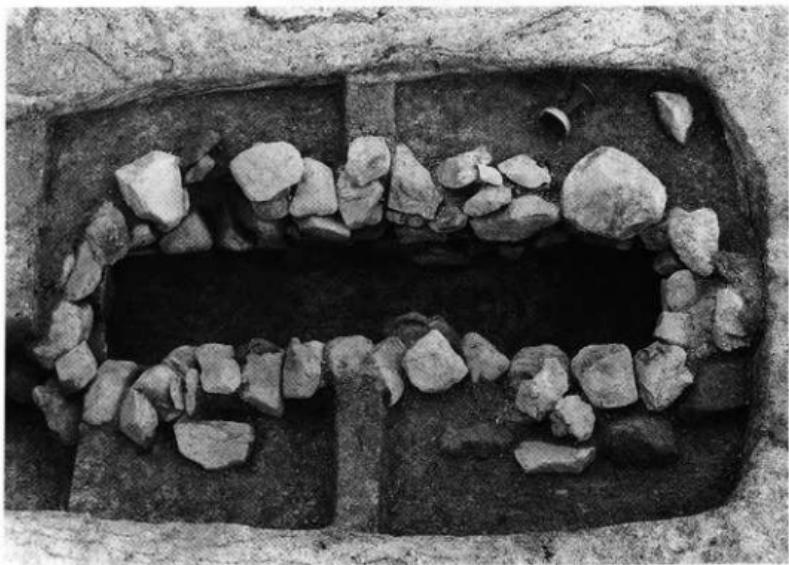
ノノワ1号墳全景(北から)



〈図版5〉



ノノワ1号墳石室検出状況（北から）



ノノワ1号墳石室検出状況（東から）

〈図版6〉



ノワ1号焼石室西側石壁状況（東から）



ノワ1号焼石室北小口石壁状況（南から）



ノワ1号焼石室南小口石壁状況（東から）



ノワ1号焼石室北小口石壁状況（南から）

〈図版7〉



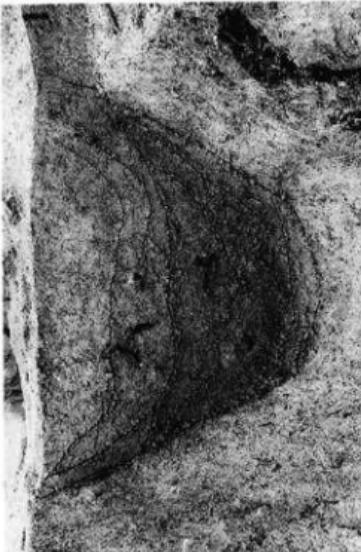
ノワ1号坑排水管取付け状況（南から）



ノワ1号坑排水管取付け状況（東から）



ノワ1号坑排水溝土層堆積状況（北から）

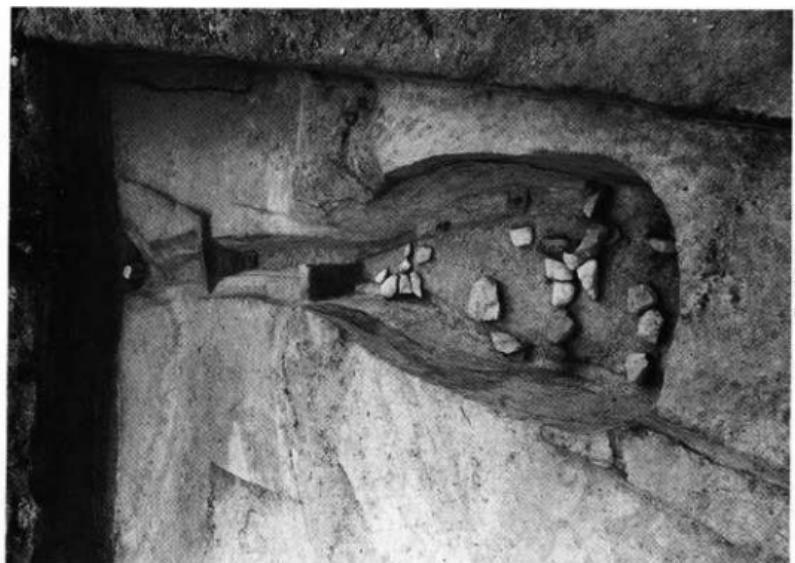


ノワ1号坑排水溝土層堆積状況（南から）

〈図版8〉



ノワ2号塚全景(南から)



ノワ2号塚全景(北から)

〈図版9〉



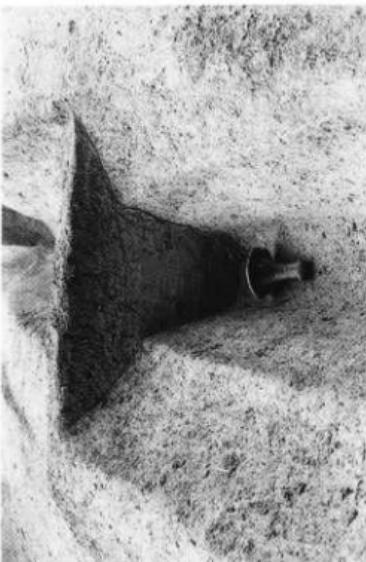
ノノワ2号墳内部全般 (東から)



ノノワ2号墳排水溝内土器出土状況 (北から)



ノノワ2号墳排水溝土層堆積状況 (北から)



ノノワ2号墳排水溝土層堆積状況 (南から)

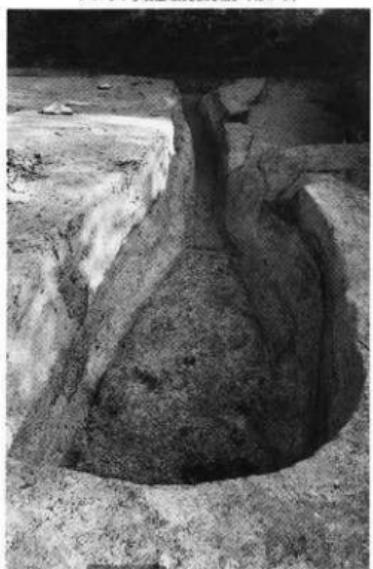
〈図版10〉



ノノワ1号墳墓壇完掘状況（北から）



ノノワ1号墳石室解体状況（南から）



ノノワ2号墳墓壇完掘状況（北から）



ノノワ2号墳墓壇完掘状況（南から）

〈図版11〉

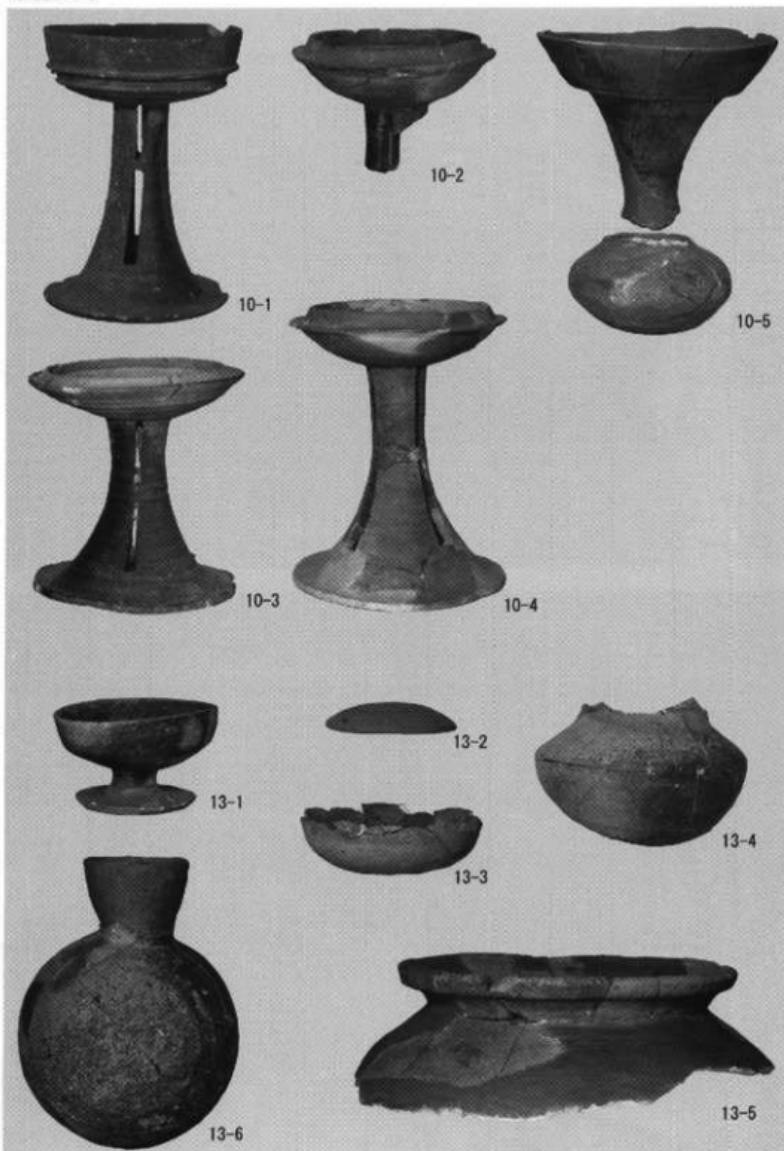


ノノワ3号墳全景(南から)

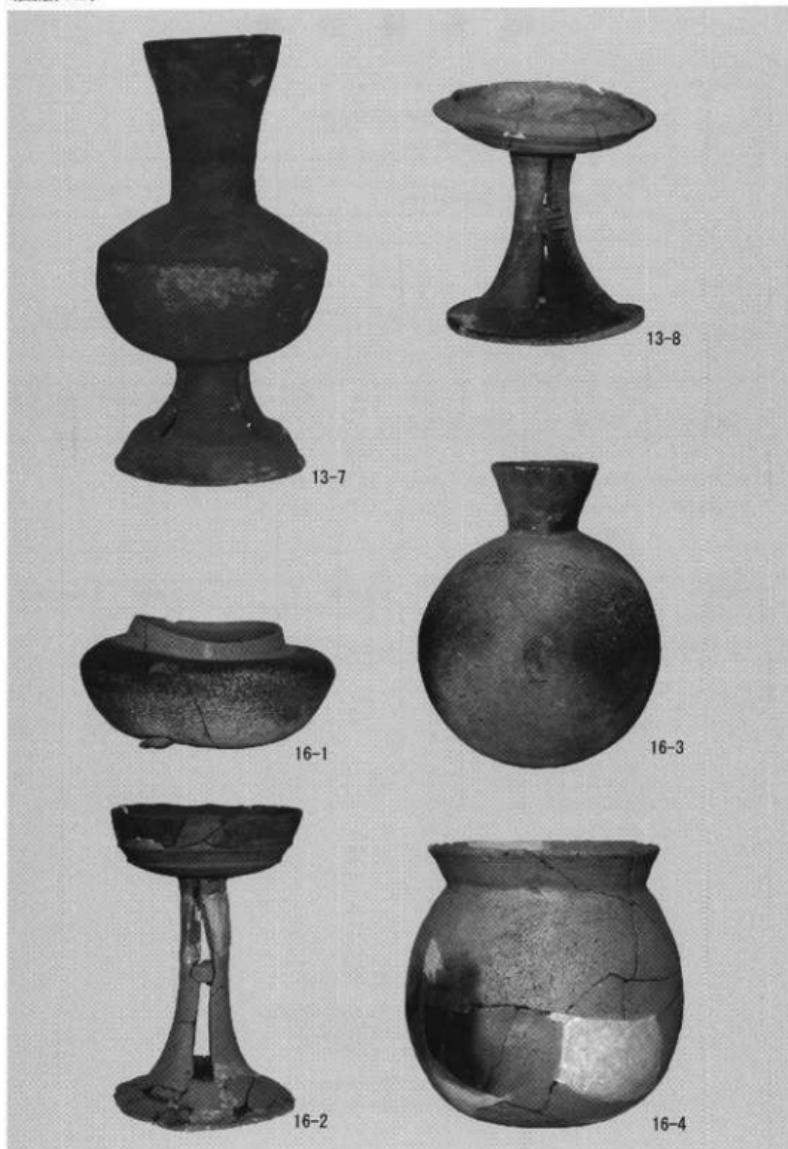


ノノワ3号墳全景(北から)

〈図版12〉



〈図版13〉



報告書抄録

ふりがな	にきやまこふんだい 2 じはんいかくにんちょうさがいほう
書名	新木山古墳外堤第2次範囲確認調査概報
副書名	ノノワ古墳群発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	広陵町埋蔵文化財調査概報
シリーズ番号	8
編著者名	井上義光
編集機関	広陵町教育委員会 文化財保存センター
所在地	〒 635 - 8515 奈良県北葛城郡広陵町大字南郷 583 番地 1 TEL0745(55)1001
発行年月日	西暦 2010 年 2 月 22 日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 番号	遺跡 番号	北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積	特記事項
にきやまこふんだい 新木山古墳外堤 ノノワ古墳群	ならけんきたかづらぎぐん 奈良県北葛城郡 こうりょうらじょはづかみみつまし 広陵町大字三吉	29426	10-D -76	34 ° 33 ′ 12 ″	135 ° 44 ′ 12 ″	1990.12.17 ~ 1991.3.18	455 m ²	

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新木山古墳外堤 ノノワ古墳群	古墳 古墳	古墳時代 古墳時代	外堤 竪穴式小石室	須恵器、埴輪	

広陵町埋蔵文化財調査概報 8
 新木山古墳外堤第2次範囲確認調査概報
 ノノワ古墳群発掘調査概報
 平成22年2月22日
 発行 広陵町教育委員会
 印刷 吉岡印刷株式会社